



龍神駅
ガード下（死者の
遺体）

「龍神駅ガード下に於ける避難者死体焼却の図」市民は、猛火をくぐり、猛煙にむせびながら、右に左に危地からの脱出を計ったが、なかには四方を火に包まれて、逃げ場を失ない、土居川・内川や貯水槽などに浸って九死に一生を得たもの、避難の途中で直撃弾で倒れるもの、全身黄錆の飛沫を浴びて生不動となって悲惨な最後を遂げるものも少なくなかった。親は手を求め子は親を呼び、兄弟姉妹、妻子たがいに肉身を探しあって、悲叫号泣、まことに阿鼻叫喚の焦熱地獄。なかでも龍神駅（現堺駅南方）付近において逃げ道を失ない、遊廓の女性をはじめ数百の市民が一団となって無残の焼死を遂げたことは、酸鼻、面をおおう世紀の悲惨事であった。（20年7月11日・岸谷勢蔵氏空襲翌日写生 堺市博物館蔵）



焼野原になった瓦町付近（撮影は、空襲からしばらくたった後日と推定される）



炊事の水を求めて 飲料水にも事欠くことになった。空襲によって家屋とともに破壊されて漏水する路上の水道管に集まる罹災者。



戦災死者追悼式 第4次空襲による1860余りの戦災死者の追悼式が龍神駅前の焦土に祭壇を設け、市長が祭主となって行われた。遺族席には嗚咽の音がしきりに起り、悲愴なものだったと伝えられている。（7月29日）



壕生活 5次におたる空襲で市街地の大半が焼野原になった。家屋を失った多くの人たちは、防空壕に焼トタンなどを囲って壕生活を余儀なくされた。